

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議第3回会議

議事概要

日時 令和8年6月4日(木)

14:00～16:00

場所 岡山県庁3階大会議室

1 開会

2 議事

- (1) 本日の審議の進め方について
- (2) テーマ・議論の観点について
- (3) 実践発表・協議

3 閉会

<議事概要>

会長 | 本日の審議の進め方について、事務局から説明をお願いしたい。

○事務局

本日の審議の進め方について

【資料1】

会長 | 本日の審議の進め方について、ご意見があればお聞かせいただきたい。

全員 | (意見なし)

会長 | 事務局からご提案いただいた内容で、本日の審議を進めていきたい。前回の内容を受けてのテーマ・議論の観点についてご説明いただきたい。

○事務局

テーマ・議論の観点について

【資料1】

会長	<p>「子どもの学び」に関しては、多様な学びや、子どもと大人の関わりといった視点が必要との意見があった。</p> <p>この「子どもの学び」は、子ども同士の学びにとどまらず、子どもと大人の学び、さらには子どもの学びを支える大人同士の学びまで含むと捉えられる。事務局側も、議論のまとめの視点や材料としてこれらを取り入れていく意向である。そのため、テーマ案を正式決定したいがいかがか。</p>
全員	(意見なし)
会長	<p>テーマは事務局の提案どおりと決定する。</p> <p>議論の観点として2点挙げられた。この後に行われる藤井参事からの発表を聞くにあたって、また今後の審議を進める上でも重要な観点であると考えるが、このとおりで進めてよいか。</p>
全員	(意見なし)
会長	<p>了解を得られたため、事例発表に移る。前回の会議では、社会教育士の取り組みについて高梁市から発表があった。今回は社会教育主事の取り組みとして、井原市教育委員会学校教育課兼生涯学習課の藤井参事より発表いただく。</p> <p>事務局から提案のあった、「どんな学びを設定すると持続可能な地域につながるのか」「学校や外部と連携するにはどのようなポイントがあるのか」という観点を意識して発表をお願いしたい。</p>

○井原市教育委員会 藤井 剛 参事

実践発表

【資料2】

協議

(議事(3)のとおりに)

会長	<p>「子どもの学びを通じた持続可能な地域づくり」および「社会教育主事の取り組み」について、審議を進める。</p> <p>藤井参事より、「どんな学びを設定すると持続可能な地域につながるのか」「学校や外部と連携するにはどのようなポイントがあるのか」を含めてお話しいただいた。</p> <p>これらに関して、どちらの観点からでも、あるいは質問でも構わないので委員の皆様からご意見をいただきたい。</p>
----	---

委員

起業家教育の視点と幸福度・知的好奇心の高まりについて、パス係数が高く出ているが、起業家教育とは、具体的にどのような活動をしているのか。

井原市

資料スライド14の右下に示しているが、「起業家教育の視点」とは、非認知能力を使いながら、子どもたちが自分たちで新たな価値を作り出していく視点である。

これは、地域の魅力の拡大や課題の解決に向けて、子どもたち自身が考え、自分たちの手で実現していく活動を指す。その過程においては、アントレプレナーシップとして求められるレジリエンス（回復力）や、先を見通す力といった能力もおのずと発揮され、育まれていく。だからこそ、これらをあえて「起業家教育の視点」という言葉で捉えている。

ここで特に重視しているのが、単なる「参加」ではなく「参画」という姿勢である。ただ単にボランティアや一人の構成員として活動に加わる（参加する）のではなく、自分らしさを発揮しながら主体的に関わる（参画する）こと自体を大切にしている。

具体的には、起業家のように「自分たちでこうやっていこう」と未来を切り拓く主体性、チャンスを見出す機会発見力、そして周囲と手を取り合う協調性を、日々の活動を通して育てていく。

委員

発表の中で「行政の縦割りをいかに壊していくか」と指摘されたが、まさにその姿勢こそが子どもたちにとって最大の学びになっているのではないかと。目的のために柔軟な発想でやり切ろうとすることが、今求められている。誰かに教えられた正解をなぞるのではなく、誰もやっていないことに挑みながら、目的達成のために自ら学び続けていく子どもたちを育てていくことが重要なのだと、改めて実感させられた。

また、社会教育の強みは「社会全体を見渡せる」点にある。今回のテーマである「持続可能な地域へのつながり」も、そこへ通じている。何のために持続可能な地域づくりが必要なのか。それは、教育も含めたすべての営みが「社会全体を良くするため」にあるからだろう。地域課題の解決にしても、「なぜ今、自分たちが解決しなければならないのか」を本質的に理解し、それが地域限定の話ではなく、社会全体を良くするためのアクションなのだと思えるような仕掛けづくりが重要になるだろう。

先日興味深い話を聞いた。皆さんも実感している通り、瀬戸内海は非常に美しくなった。しかし一方で、魚が激減しているそうだ。原因は海藻が生えなくなったことにある。昔は足に絡まってきた海藻が、今はないのだ。

昔は人間の営みの中で排出されるものが適度な栄養素となっていたが、高度経済成長期には工場排水などによって栄養が出過ぎてしまった。そして現在は

バランスが崩れ、海の中の栄養素が足りなくなったために魚が捕れなくなったと言われている。

子どもたちに「社会課題の解決だ」と言って、海の水をもっと綺麗にしようとする活動をさせたとしても、自分たちが「解決」だと思っていることが実は真の解決ではない可能性がある。それどころか、社会全体としては別の問題を引き起こす可能性もある。そうした複雑さも含めて深く考えていけるような学びこそが、結果として社会全体を良くすることに繋がっていくのではないかと強く感じる。

井原市

大人が問いを与えるのではなく、子ども自身が問いを見つけ、解決に向けてアクションをしてみるかが大切だ。動いてみることで問いの答えらしきものを一旦見つけ、それが本当に答えなのだろうかとまた問い直してみるという循環が生まれる。よく探究の中で使われる「問い」という言葉には、そのような深い意味が込められていると考える。このあたりの実践については、横山委員がよくご存じだと思うが、どうか。

委員

「海を綺麗にしたら魚がいなくなってしまった」という例のように、一面的なものの見方で突き進んでしまうことには怖さがある。物事には多様な側面があるという学び、例えば「木を植えすぎると隙間がなくなって土が死ぬ」といった視点を提示する取り組みを、どのように設定すべきか。

必要なのは、特定のコンテンツ（教材）というよりも、1つの事象に対して多様な面があることや、「こんなものは意味がないのではないか」という着地点さえも許容する「学びの場作り」ではないか。あらかじめ着地点が決まっている雰囲気があると、子どもはそれを察知し、大人が喜びそうなプレゼンテーションをしてしまいがちである。

実際、「なぜ自校の探究がつまらないのか」というテーマで探究を行った生徒が賞を獲得した事例があった。普通であれば教師に怒られるような内容だが、生徒自身は確実に何かを感じており、それを学びにした点に良さがあった。

現在、学校現場では探究テーマが一定程度設定されている。現場の教師からは、「岡山県型」や「〇〇学」のように枠組み（型）を作ってほしいという意見がある一方で、型があるとやりたいことができないため臨機応変にやりたいという意見もあり、議論が繰り広げられている。デニムであれば取り組みやすいが別に興味はない、あるいは高粱の山田方谷と言われても興味がないと感じる生徒もいる。型を作ることのメリットと、それによる弊害のバランスを考えなければならない。

井原市

取り組みを始めた当初、探究やPBLという手法自体、先生方の理解が得られていない状態であった。学習指導要領が改定され、移行期であったが、先生方

が最も困惑していたのは、学校や学年で全く異なる取り組みをしていると、異動した際にゼロに戻ってしまうという点であった。

その中で、大枠としてどのようなテーマを共通課題に設定できるか、3案ほど出しながら検討した結果、現在の形に落ち着いた経緯がある。実態に応じてテーマを変更してもよく、1学期に共通テーマを扱っていれば2学期以降は異なるテーマでも構わないなど、かなり柔軟に設定している。資料の裏面には「このような仕掛けが使える」という参考情報も掲載している。

本日、自身も井原デニムを着用しているが、これは共通の探究素材として積極的に活用していこうという位置づけであり、必ずデニムで探究を続けなければならないというものではない。困った時にこれを使えば支援を受けやすいという、緩い設定である。1年生の段階では、綿を植えて原料に触れる活動をサポートしているが、取り組みが進んでいる学校では、これをベースにしながらさらに異なる活動へと変化させている。

委員

「場」についてであるが、場の力によって自身の立場が変わり、物事の見え方も変わってくる。環境と自分が置かれた場所が変わったところで、多様な自分を発見することができる。自分という存在は1つに留まっておらず、状況によって揺らぎのあるものであるが、多様な場を経験することで、自己の輪郭がより深く見えてくる。自分が面白いと思えば相手も面白くなる、という関わりが自分を知る助けになり、意見の核心も出しやすくなっていく。これが取り組みの強みではないか。多様な年齢、職業、立場の人々と交わることで、活動に厚みが生まれる。

環境（視点）を多様に準備できるかが勝負であり、地方（田舎）ほど選択肢が少ないと言われる格差を埋めていくことが必要であると考えます。そこで質問であるが、農林水産業に関わる方々もそうした場に参加しているのだろうか。担い手不足が叫ばれる中で、都市部の子どもが農林水産業従事者と関わる機会が少なく、将来の選択肢や想像の中に彼らの存在が生まれてこないという話を聞いたため、藤井氏がどのように取り組まれているか伺いたい。

高校生が「自校が統廃合になるかもしれない」「定員割れした学校を存続させるために何ができるか」等の課題解決に取り組むことは、前向きな目的になり得る。対策を講じずに放置しておく、例えば沖縄の久高島のように、外部の情報に憧れて島外へ出て行き、戻ってこなくなってしまうという人口減少の問題に直面する。子どもを地域に縛り付けるのではなく、多様な選択肢の中で最終的に地域を選んでもらうための、意識の溝の埋め方が大切になると感じた。

井原市

井原市では「井原 Lovers」という人材バンクを構築しており、その中には農業関係者も含まれている。井原市には海がないため水産業のつながりは少し弱いですが、とにかく「多様な人や多様な価値観に出会わせる」ということを大切に

している。教室の中だけで指導を完結させれば教員の負担は少ないが、それでは教育活動としての深みや面白さに欠ける。学校の外部からいかに新しい人材という刺激を入れて活性化できるかが重要であるため、自身のネットワークを最大限に活用して学校と地域を繋ぐことが私の役割であると考えている。

子どもたちが一度地域から出て行ったきり、戻ってこないというケースもある。しかし、まずは地域にいる間に、できる限りの魅力と課題を伝えておくことが必要である。地域のことを何も知らないまま都会へ出て行ってしまえば、戻ってこなくこともあるだろう。少しでも地域の状況が伝わっていれば将来、都会で暮らすことのデメリットが大きくなった時に、地方で暮らすメリットが見えてくる。その時に、地域を再び帰りたいような場所にしていけるかが重要な鍵であると考えている。

委員

井原市はまちづくり活動が非常に盛んな地域である。もしそうでなかったなら、藤井氏の取り組みも周囲になかなか伝わらなかったのではないかと考える。今回の事例は、まさに「井原市だからこそ実現できた」という側面が大きいのではないだろうか。

井原市

高梁市でも同様の取り組みが行われているため、井原市だからこそ実現できたというわけではないと考えるが、井原市はもともと活動が盛んな地域である。ただ、それにはメリットだけでなく課題もある。大人たちがすでに答えを持っているがゆえに、「子どもを活動に参加させたい」という気持ちが先行し、結果として学校側の都合や意図がくみ取られないことがある。そのため、学校と地域の関係性には非常に気を使っている。

過去には、教頭から相談を受け、その間に入って調整することもあったが、現在は「子どものやりたいという主体的な気持ちが最優先である」という点を地域側にも理解していただき、お祭りへの関わり方なども柔軟に変化してきた。一方で、まちづくりの取り組みが弱い地域においては、学校が主導して力を発揮しなければ最初の一步を踏み出せないという実態もある。これは地域ごとのバランスの問題であり、また「何のために活動を行っているのか」という目的を、学校、地域、家庭の三者で常に共有しておけるかどうかが重要になる。

委員

ユースセンターいばらは中学生と高校生のどちらが集まるのか。

井原市

もともとは高校生の居場所づくりとしてスタートしたものである。高校生は3年で卒業してしまうという課題や、中学生からも「この場所を使いたい」という声が上がっていたことから、昨年度から、対象を中学生や高校生、さらには若手社会人にまで拡大している。地域内に大学がないため、高校生が就職や進学をした後にこの場所を利用できなくなるのはもったいないという、地域お

こし協力隊の思いと判断によって対象を広げた。その取り組みのおかげで、卒業生が再びこの場所に帰ってきて、中高生と交流を図る場となっている。

委員

地域教育を展開していく上では、基盤となる「場」が不可欠であると考えている。地域おこし協力隊がその場所を管理していれば、開館中はいつも誰かがいるという安心する環境を作ることができる。藤井氏のように熱意を持って、自ら「活動を行いたい、活動が楽しい」と感じている大人が地域に増えれば、周囲の住民も自然と手伝ってくれるようになる。藤井氏や横山氏の役割や価値を周囲の大人にも子どもにも明確に見えるようにし、同じような熱意を持った大人を地域の中に数多く育成していきたいと考えている。

委員

私は、以前教育委員会において総合的な学習の時間やキャリア教育の仕組み化に取り組んでいた。しかし、教員の多忙さや学習指導要領の解釈などが原因で、当時は上手くいかなかった経験がある。そのため、現在、取り組みが進んでいる様子を拝見し、羨ましく思うと同時に感銘を受けた。

現在の西栗倉村では、場が次々とできている。私自身の役割は、公共施設をそれぞれの場に繋げていくことであると考えている。社会教育士にとっても、繋げるという役割は重要なところである。

私は、人同士が繋がることで場も繋がっていくという仮説を持っている。しかし、自分の思いを形にしていくことが苦手である。藤井さんは、これまでどのようにして人と繋がってきたのか、その手法を伺いたい。

井原市

最初は名刺を配ることや、もらうことからスタートした。ちょうど SNS が発達してきた時期であったため、SNS 等を活用しながら出会った人と繋がり、この人と何かをやりたいと思ったら連絡をして、当たって砕けることを続けてきた。年間で 300 枚から 400 枚くらいの名刺を交換して、とにかく当たってみるということをした。あとは楽しい時間を一緒に過ごして、「あんなことをやりたい」と話すと、1、2ヶ月後には実現しているということを繰り返してきた。

委員

藤井さんは、社会教育主事を受講した時のメンバーであった。その時から「何かをしてくれる人だな」という印象を持っており、私も巻き込まれたいと思っていた。仕事の中で落ち込んだりすることもあると思うが、どのようにしてモチベーションを上げているのか。

井原市

私は、本当は人見知りであり、性格も暗い方である。しかし、最終的にはどうにかなるだろうと考えている。本当に辛いこともあるが、駄目だと思った際にはきっぱりと切り捨てるようにしている。絶対に無理だと判断したことはやらないし、苦手な人とは適度に距離を置くようにしている。自分に素直になり、

あまり突き詰めすぎず、気分転換に体を動かすことも日課にしている。

委員

場が大事だという話を聞いて、私が勤めている公民館もまさにその場になれると考えた。公民館は各地にあるためうまく活用して、人づくり、繋がりづくりを行っていきたい。

井原市

ひとづくり事業をスタートした時に、「これも人づくりではないか」と仕事がたくさん来たが、ひとづくり事業ですべてが完結できるわけではない。事業が担えるのはひとづくりの限られた部分でしかない。

それぞれの立場でできることが異なるため、役割分担をしながら、無理に一緒にするのではなく、整理して取り組んでいくことが大事である。生涯学習課として、学校教育課として、あるいは藤井としてできることはここまでであるというラインを引くことも重要であると考えている。

委員

今日のテーマである「どのような学びを設定するか」「外部と連携するには」についてであるが、赤磐市では、社会教育主事の役割は単なるコーディネーターではなく、コンシェルジュであるべきだと伝えている。

コンシェルジュになるためには相当な勉強が必要であるが、これからの社会教育主事にはその立ち位置が必要だと感じた。外部と連携するためには、コンシェルジュという考え方が必要であると考えている。

委員

私は岡山県高等学校 PTA 連合会の会長を務めている。学校は多くの人に関わるという意味で良い場であると思うが、PTA に対して否定的な考えを持つ方が多いのも現状である。

研修で、PTA の中に生徒も入る「PTA+S」という形態を知り、興味を持った。これを学校に持ち帰っても、教員が多忙であるために取り組みが進まない。意欲的な子どもと意欲的な教員が、うまく巡り合うにはどうしたらよいだろうか。

子どもは興味があることには熱中するし、アルバイトを選ぶ際にも「楽しいか、頼りにされているか」を基準にしている。このような仕組みを、どのようにすれば教育現場に持ち込めるだろうか。

井原市

子どもたちはどのような人からも学び、吸収することができる。来たいと言ってくれた人はなるべく受け入れ、色々な人と出会えるようにしている。その子どもが何を感じたのかを言語化し、友達に伝えるワークを取り入れることで、直接関わっていない方のことも共有できるよう心がけている

委員

行政の仕事は決まったことを行っていくのが常であったが、このような場

で最前線の方の話を聞くことは有益であると思う。それをうまく言語化していくことが大事であると勉強になった。

井原市

今日お話しした内容の中で、私が自分で考えて生み出したことはほとんどない。どこかで出会った「面白そうだ」と感じることを持って帰り、アレンジしているだけである。アイコンなどもプロの外部人材に依頼している。私は、外部から持ってくるアレンジャー的な立場であると考えている。

副会長

井原は幸せであると思った。「持続可能な地域づくり」などのテーマが、時に表面的に都合よく利用されているケースもあるが、みんなの幸せのために取り組むのだという軸をしっかりと持っている。のんびりした子どもに対しても「ここにいてよいのだ」と思えるようなメッセージを発していきたい。

活動を続けているとマンネリ化してくると思うが、どのように防いでいるのか。また、家庭をどのように巻き込んでいるのか。

井原市

家庭を巻き込むことは難しい課題である。仕事をしている現役世代であるため、若年世代や保護者層にどのように関わってもらうかは常にテーマとなっているが、正直なところ答えは出ていない。ただ、井原市では商工会議所とウェルビーイング経営を推進しており、休暇を取得してこうした取り組みに参加しやすい環境ができればよいという話はある。

マンネリ化については、教員には定期的な異動があったり担当する学年が変わったりするため、今のところ大きな見直しはしていない。ただ、どのようにして新しい風を吹き込んでいくかは、検討しながら取り組んでいこうと考えている。

会長

どのような質問に対しても、藤井さんは対話し、返答している。それは社会教育主事としての対話力が磨かれているからだと感じた。

学びの設定についてであるが、藤井さんの発表にある学びは、大人が課題を押し付けるものではなく、子どもと大人がフラットに学ぶ設定になっている。その学校での「総合的な学習の時間での学び」と、それ以外の「社会教育的な学び」が、どのように関連し相互作用しているのかが気になる。手法は違うのだが、どのように還元し合っているのか。

井原市

結局は場の違いでしかないのですが、その子どもが学校で学ぶのか、あるいは地域で学ぶのかという違いである。ユースセンターに来て話をしている子どもが学校の教員に提案することもあるし、逆に学校からユースセンターに相談が来ることもある。市内には高校が3校しかいないため、関係者同士で「このような子どもの意見がある」と連絡を取り合い、情報を共有するようにし

ている。

学校教育と社会教育の手法は違うが、それを繋げているのは「井原“志”民力」という指標の設定であると思う。その指標を共有しているからこそ、お互いの特徴を活かして進められている。

会長

強みでもあり、課題でもあるのが、藤井さんが学校教育課と社会教育課を兼ねており、縦割りを越えて繋がっている点である。これを、単に兼務を増やせばよいという発想にしましては本末転倒である。兼ねているからこそできることもあるが、教育委員会内の学校教育課と社会教育課、あるいは社会教育主事と社会教育士がタッグを組んで回していける形が大切である。

社会教育の世界は暗黙知で言葉にしにくい取り組みが多いが、それを藤井さん個人の能力によるもので終わらせず、形式知として可視化し、他の人でも取り組めるようなヒントを皆さんと考えていきたい。

本日の議事を終了し、事務局へお返しする。

事務局

最後に事務連絡を行う。本日の議事録については、後日委員の確認を経た後、県のホームページにて公開する予定である。

以上をもって、第3回岡山県生涯学習審議会および岡山県社会教育委員の会議を閉会する。